



①鹿児島市山下町「朝日通り」から望む桜島

桜島との共生

世界屈指の活火山

その周辺に多くの県民が暮らす

桜島との共生が鹿児島県の歴史

桜島は鹿児島湾の中央部に浮かぶ、世界有数の活火山であり、その存在感は圧倒的で、鹿児島県のシンボルとして多くの人々を魅了し続けています。一方で、噴火による降灰は鹿児島県民を悩ませ続け、過去には大規模な噴火で大きな被害をもたらしました。桜島との共生は県民にとって重要な課題でもあります。

桜島が誕生したのは約2万6000年前。桜島を含む始良カルデラ（鹿児島湾北部一体）の火山活動は大昔から活発で、鹿児島島の土壌には火山灰が分厚く積み上がっています。有史以降も天平玉宇噴火（764年）、文明噴火（1471年）、安永噴火（1779年）、大正噴火（1914年）、昭和噴火（1946年）など大噴火がたびたび発生。大正噴火では流出した溶岩により桜島と大隅半島の間にあった瀬戸海峡は埋められ、桜島は大隅半島と陸続きになりました。火山灰や軽石も大量に噴出し、2メートルも積もった場所もあり、黒神地区の埋没瓦屋居は、当時の噴火の凄まじさを現在に伝えています。

大正噴火後に桜島の子どものための教育や防災の必要性から海上輸送力の増強が図られます。

西桜島村（現在は鹿児島市）は、昭和5年に村営の貨



6



4



2



5



3

- ② 鹿児島市山下小学校前で新聞紙を頭にかぶって登校する生徒 (昭和38年9月) ③ 桜島大根の出荷風景 (昭和32年頃)
 ④ 降灰の中、行き交う人々 (昭和42年6月) ⑤ 桜島に登山中、爆発に遭遇し、帰校する松原小学校の生徒たち (昭和30年10月13日)
 ⑥ 桜島での生活風景 (昭和30年代)

客輸送船を稼働。昭和9年から定期船の運航を開始しました。これが桜島フェリーです。現在は24時間体制で1日に166便が就航していて、年間乗降客数500万人以上と日本で最も利用者の多い航路となっています。

昭和21年の昭和噴火以降はしばらく小康状態が続き、山頂への登山も可能でしたが、昭和30年から再び火山活動が活発になり、降灰が日常的なものになりました。特に昭和40年〜60年頃は南岳の活発な活動により、現在の4〜5倍ほどの降灰量を記録。この頃から桜島近辺の自治体では、降灰対策が実施されるようになり、鹿児島市では、昭和53年から降灰除去事業を実施。路面清掃車・散水車の稼働、「こくはいろ克灰袋」の配布と宅地内降灰の回収など、現在では市民にとって馴染みのものになっています。

このように、噴火・降灰で人々を悩ませる桜島ですが、私たちに恵みももたらします。昭和50年頃までの桜島は、農家一戸当たりの農業所得が県内一で、「玉の島」といわれていました。現在でも、さまざまな農作物が栽培されており、世界一小さい「桜島小みかん」や世界一大きい「桜島大根」は桜島の特産品となっています。

多くの人々を魅了し、豊かな恵みをもたらす桜島は、反面、大きな災害をもたらす可能性もあり、日頃から火山噴火に備えておくことも重要です。

平成26年1月26日で大正3年の大噴火から100年を迎えます。

現在、桜島との共生を図るため、行政、観測・研究機関や防災関係機関等が連携し、火山災害に備えた準備を整えています。過去の教訓を活かし、住民が安心して生活できる環境整備を進め、後世に伝えていかなければなりません。

広告